

Baif, Lazare de

Lazari Bayfii annotationes in L. II. de captivis, et postliminio reversis, in quibus tractatur de re navali.

Parisiis, Ex Officina Rob. Stephani, 1536. 4vols. in 1. illus. (wood). 21×15cm.
〈K045-B〉 文献番号 1-11

Hiler p. 59 Lipper. 99

バイフ, ラザール・ド『ラザール・ド・バイフ学説彙纂への注解』

16世紀フランスの人文主義者であり外交官であったラザール・ド・バイフ(1496?-1547)の三部作『航海術』『衣服論』『容器論』に、イタリアの文献学者アントニオ・テレージオ(1482-1534)の『色彩論』を付録として加えたラテン語の著作である。『衣服論』は1526年の、『容器論』は1531年の初刊で、『航海術』を加えた本書は1536年に出版された後、1540年代までパリのロベール・エティエンヌ書店とバーゼルのフローベン書店で再版が繰り返されている。三部作はローマの法学者の学説集成『学説彙纂』の注解というかたちをとっているが、古代についての考古学の著作ともいえる。『色彩論』は1528年にヴェネツィアの初刊で、色彩に関する近代最初の論考といわれる。三部作の著者バイフは法学を修め、ローマに留学した後、フランソワ1世の顧問やヴェネツィア大使を務めている。古典古代の作品の翻訳家として第一線で活躍し、プルタルコスの伝記の翻訳や、ソフォクレスの『エレクトラ』の韻文訳などが知られている。庶子アントワーンはブレイヤッド派の詩人として名高い。

『衣服論』は21章からなり、古代服飾に関することばが多くの古典の作品から引用され解説されている。ストラ、トゥニカ、パルラ、トガ、スンテシス、パルダードメントゥム、クラミュス、パリウム、サグム、ラケルナなど今日の服飾史でよく知られていることばはもちろん、絹や古代紫(パープル)など織物や色彩、その表徴機能にいたるまで実に多くのことが網羅されている。引用の作家はプルタルコス、ヘロドトス、プラトン、ヴェルギリウス、プリニウス、マルティアーリス、タキトゥス、テオフラストゥス、キケロ、ホメロス、ホラーティウス、ストラボンに及び、古典に通じた人文主義者の面目躍如たるものがある。初刊本には挿絵はなかったが、本書では衣服論に木版画3図が含まれている。右図は簡単な説明のついた最初の図である。(徳井)



ローマに現存する最古の建造物より
着衣の女性像